

6) 興味ある側副血行路の形成をみた肝硬変の一例

柳澤 京介・早川 見史
杉浦 広隆・渡辺 律雄
渡辺 庄治・小林 由夏
大坪 隆男・飯利 孝雄
七條 公利 (立川綜合病院 消化器内科)

肝硬変患者に認めた稀な側副血行路に関し報告する。症例は73歳男性で、肝性脳症で2度の入院歴をもつ。超音波・CTにて、右腎上極周囲に著明な脈管の拡張、蛇行を認めた。腹部血管造影検査で、この異常血管は上腸間膜静脈から右腎被膜静脈を介在し、下大静脈に注ぐ門脈-大循環短絡路であることが判明した。本症例では、この側副路が高度に発達しているため、食道胃静脈瘤や脾腫は認めず、治療抵抗性の高アンモニア血症が継続していると考ええる。門脈圧亢進症にみられる側副血行路の中で、上腸間膜静脈から下大静脈へ至る短絡路は約1%程度と頻度は少なく、中でも、右腎被膜静脈を介在流出路とする症例の報告は見当たらない。

7) 術前門脈塞栓術の意義

土屋 嘉昭・田中 乙雄
梨本 篤・筒井 光広
藪崎 裕・牧野 春彦 (県立がんセンター)
佐野 宗明・佐々木壽英 (外科)

1992年4月より当科にて施行された肝切除術は260例であり、右3区域切除予定例に対して6例に術前門脈塞栓術を行いその意義について検討した。全例経皮経肝的門脈造影後右前・後枝をおもにゼロフォームで塞栓し、2週前後でCTを行い残存予定肝体積を測定し手術を行った。残存予定肝体積は1~11%の増加(平均6%)を示した。ヘパプラスチンテストも増加傾向を認めた。肝硬変合併肝細胞癌1例が術後肝不全死したが、5例は術後経過良好であり術後肝不全予防可能であった。今後の問題として胆管炎など感染症を伴う肝臓に術前門脈塞栓術は有用であるかどうか検討が必要である。

8) アメーバ性肝膿瘍の一例

松永 卓二・稲田 勢介
佐藤 知巳・波田野 徹 (厚生連長岡中央
富所 隆・杉山 一教 (綜合病院 内科))

症例は33歳男性。既往歴は東南アジアへの数回の渡航歴あり。平成10年2月10日より発熱、右季肋部痛出現し2月25日腹部エコー、CT所見より肝膿瘍が疑われ同日

当科入院。緊急エコー下肝膿瘍ドレナージを施行。肝左葉S4領域を中心に境界明瞭で巨大な膿瘍を認め暗赤色調の膿汁が排液されたが鏡検ではアメーバは陰性。抗生剤の全身投与と膿瘍内注入、膿瘍洗浄を施行したが解熱せず3月16日突然、吐血後ショック状態となり緊急手術施行。術中所見では膿瘍が十二指腸へ穿破しており膿汁からアメーバが検出されたため抗アメーバ薬の投与を開始。術後7日目に膿瘍腔から出血しショック状態となったため再手術を行い十二指腸外瘻術を施行。術後経過は良好で初回手術より2ヶ月後に退院。

9) 成人間生体部分肝移植を施行した原発性胆汁性肝硬変の一例、本学施行第一例

坂井 邦彦・関 鈴子
高橋 達・野本 実
市田 隆文・青柳 豊 (新潟大学
朝倉 均 (第三内科))
佐藤 好信・黒崎 功
白井 良夫・畠山 勝義 (同 第一外科)
田中 紘一・阿曾沼克弘 (京都大学
移植外科)

症例は52歳の男性。38歳時肝機能障害を指摘され、45歳時腹腔鏡下肝生検にてPBCと診断された。46歳時より掻痒感、51歳時より黄疸も出現した。58歳時血清総ビリルビン値上昇し、1999年1月11日当科に入院した。PBCの予後予測因子Death Rate(6ヶ月後の死亡率)が81.2%で、肝移植の適応と判断した。次男がドナーを希望し、3月2日成人間生体部分肝移植を施行した。術後は総ビリルビンやトランスアミナーゼの上昇及び肝生検所見より拒絶が疑われた場合にステロイドセミバルス療法にて対処した。観察期間は短いですが、現在のところ経過良好である。

10) 緊急生体部分肝移植を施行した亜急性型劇症肝炎の一例

西浦 智子・若杉 裕
大森さおり・柳 雅彦
関根 理 (水原郷病院)
上村 朝輝 (済生会第二病院)
市田 隆文・朝倉 均 (新潟大学
第三内科)
佐藤 好信・畠山 勝義 (同 第一外科)
田中 紘一 (京都大学
移植外科)

62歳女性。1999年1月20日感冒様症状で近医から内服薬を処方された。食思不振、尿の黄染が出現し2月13